

九州正教会だより

第62号



(福岡・熊本・人吉・鹿児島)

2024年11月1日発行

発行人：司祭グリゴリイ水野 宏

〒811-2232 福岡県糟屋郡志免町別府西 2-7-1

TEL / FAX 092-410-0540

mail ocj.kyushu@gmail.com

ウェブサイト <https://www.ocj-kyushu.com/>



お節介のすすめ

司祭グリゴリイ 水野 宏

福岡に引っ越して5か月経ち、博多っ子と呼ばれる周囲の人々との付き合いも増えました。彼らはすぐ「博多っ子はお節介焼きやけん」などと言いますが、確かに九州出身でない私だけでなく、知らない他人でも困っているのを見ると、助けたくなる性分の人が多い印象です。

さて、年間第22主日（今年は11月24日）の福音書では、「善きサマリヤ人のたとえ」（ルカ 10:25-37）が読まれます。これは、イエスを試すために「隣人を愛せというが、その隣人とは誰のことか」と尋ねる律法学者に対して、イエスが答えとして語ったものです。

ある旅人が強盗に襲われ、重傷を負って倒れていた。そこにユダヤ人社会で「立派な人」と見なされている祭司、続いてレビ人が通りかかったが、その怪我人を無視して行ってしまった。三番目に通りかかったのはユダヤ人から差別されているサマリヤ人だったが、彼は怪我人を一生懸命介抱して宿の費用も負担した。つまり自分を嫌っているかもしれない、見ず知らずの人を救うためにできる限りのことをした。では、この怪我人にとって祭司、レビ人、サマリヤ人の三人のうち、隣人と呼べる者は誰か、というのがこのたとえ話の内容です。

つまり私たちが隣人愛と言った場合、つい居住地や出身地、所属組織などの共通性や立場の上下関係を意識しますが、キリスト教信仰においてはそうではなく、「自分以外の全ての人々が隣人であり、愛すべき対象」だということです。これはイエス自身が、「私があなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」（イオアン 15:12）と言っているように、私たち人間は等しく神に造られた兄弟姉妹であり、誰もが神から愛されている存在なのだから、私たちの側も皆がお互いを尊重し、愛し合うのは当たり前だという考えに基づくものです。

私たちキリスト者は相手が誰であろうと、博多っ子の言う「お節介」、つまり困っている人、苦しんでいる人に目を留め、できることをしていくように心掛けましょう。